ライフケアガーデン湘南　2階

症　例　概　要　利 用 者　　：70代　女性　要介護5

利用期間　：2023年 9月　～　2024年 8月現在

主 疾 患　　：大動脈解離後の脊髄梗塞

経　　過　　：デパート勤務を65歳まで続け、同居していた母の介護のため定年退職。ご自宅で3 ～ 4年の介護生活を送っていた。2022年12月トイレ時に胸腹痛ありその後に失神。救急搬送され大動脈解離と診断され緊急手術。術後、解離による脊髄梗塞を発症、治療を行ったが両下肢麻痺、腹部から下部にかけての感覚麻痺、排尿障害が残存。仙骨部の褥瘡形成もみられた。急性期治療を終え、2023年4月リハビリ目的で回復期病棟へ転院しADLのアップと維持、褥瘡治療を行った。車椅子生活で回復期治療が終了となるが独居生活は困難。褥瘡も完治していない為、継続看護・介護が必要となり当ホームへ入居となった。医師、看護師、介護士と協力し、褥瘡治癒を目標としたQOLの向上を試みた症例。

内　　容

2人姉妹の長女として東京で生まれ育つ。高校卒業後、デパートの販売員として勤務していた。母の介護をするまでは仕事に励み、休みの日はショッピングに出掛けたり、好きなスポーツをテレビ観戦したり、ご友人と年に1 ～ 2回の旅行を楽しむ生活をされていた。突然の発症とその後に両下肢麻痺出現、歩行困難となり車椅子生活。排尿障害による膀胱留置カテーテルの挿入、ご自身が意識を取り戻した時には仙骨部に大きな褥瘡が出来ていた。また、発症した同月に実母も逝去されている。入院治療を終え、入居された時には入浴、更衣、排泄介助は必要ではあったが、車椅子移動・移乗は自立されていた。しかし、表情は暗くご自身の現状に涙する姿もみられた。褥瘡は大きく浸出液もあり毎日2回の処置が必要とされていた。褥瘡部の圧迫を避ける為、食事や入浴以外は居室のベットで過ごされる事が多く、他の入居者との年齢差や他者の噂話を好まないと、余計に自室にこもりがちな生活環境になっていた。親族が近くに暮らす当ホームに入居されたが、外出される事もない日々を送っていた。その人らしい生活を送ってもらう為に改善策として、QOLの向上を目的とした褥瘡治癒を目指し、多職種での協力体制で褥瘡ケアを行うこととした。主治医は皮膚科医へ状態を伝え、診察と指示を定期的に仰ぎ使用軟膏や薬剤を調整した。看護師はご本人と相談しながら排便コントロールを行い、便による感染予防に努めた。また、毎日の処置を介護士と協力し、安全な体位で清潔保持する事ができ不安の解消にもつながった。また褥瘡状態の共有も行うことが出来た。1日2回の処置が褥瘡の改善と共に1回に減り、ご本人の気持ちも前向きになっていった。医師との信頼関係もでき、ご自身から褥瘡の改善になるからとプロテインを自費購入し毎日飲用される姿もみられた。褥瘡が日を追うごとに小さくなり「みんなに小さくなった

と言われるけど私には見えないのよ。」と嬉しそうに話す事が多くなり徐々に活動範囲が広がり始めた。ご自身で自室から出て来ては壁の掲示物を見て回ったり、他入居者さんがいるデイルームで本を読んだり手紙を書いたりしていた。好まなかったレクにも参加するようになり笑顔も多く見られるようになった。看護、介護で話し合い積極的に外出レクへお誘いし出かけた。「楽しかった。今度はここにも行きたい。」と自身の思いや希望も口にする事が多くなっていった。近くに住む親族と外出し外食する回数も増え、「今日はここで食べたのよ。美味しかった。家族と過ごせて楽しかった。」と嬉しそうに話してくれるようになった。「私はここで褥瘡を完治させるのが目標。」と話されている。後もう少しで治りそうな褥瘡。完治を目指しこれからも医師、看護師、介護士と協力し更なるQOLの向上につながるよう援助して行きたい。